

教育論文

意欲的に学び，人・学習内容とつながる児童の育成
～ 生徒指導の３機能を意識した授業づくりをとおして ～

目次

1	はじめに	1
2	研究の概要	
(1)	主題設定の理由	1
(2)	研究主題の分析	2
①	「生徒指導の3機能」の解釈	
②	人・学習内容とつながる児童とは～集団づくりと意識調査～	
(3)	研究の仮説	3
(4)	研究の視点	3
(5)	研究の構想図	3
3	研究の実際	
	<u>視点1 生徒指導の3機能を意識した授業づくり</u>	4
①	「自己決定の場を与える」取組	
②	「自己存在感を与える」取組	
③	「共感的人間関係を育成する」取組	
	<u>視点2 人とつながる集団づくり～意識調査の結果を基にした取組～</u>	8
①	特別活動の充実をとおした取組	
②	「つながり」を意識した日常的な取組	
③	「思いを受け止める」人権教育の推進をとおした取組	
4	研究のまとめ	
(1)	児童の意識や実態の変容	11
(2)	研究の成果と今後の課題	12
5	おわりに	12

意欲的に学び、人・学習内容とつながる児童の育成
～ 生徒指導の3機能を意識した授業づくりをととして ～

1 はじめに

学校は、本来子供が学力や社会性など様々な能力を身に付け、安心して過ごし、成長することができる場所である。しかし、現在の学校現場は、いじめや不登校、学級崩壊など様々な問題を抱え、小学生の全人数は減っているにもかかわらず、問題行動はどれも過去最高となっており、一つの問題が起こるたび、大きく世論で取り上げられている。また、家庭環境や保護者の価値観、SNSの発達、社会的背景など子供を取り巻く環境も急激に変化している。

一人一人はその子供なりのよさをもっている、発揮されることなく成長する姿を見るのは教員として辛く、何とかして自分らしさを表現しながら安心して学校生活を送ってほしいと考えた。子供たちが一日の大半を過ごす学校で、教育をととして幸福感を感じることができるならば、伸び伸びと生活し、よりよく成長することができるだろうと考え、授業改善や研究授業、学級づくり等に積極的に取り組んだ今年度の実践を中心にまとめていきたい。

2 研究の概要

(1) 主題設定の理由

① 本校の研究主題より

今年度本校に着任し、校内研修において3つの教育課題が共通認識として挙げられた。一つ目は「子供の主体性を伸ばすこと」、二つ目は「子供同士の聴き合う関係を育てること」、三つ目は「生活および授業における規範意識を高めること」である。これらの教育課題の解決に向けて、生徒指導の3機能を意識した授業改善及び集団づくりを校内研修のテーマとして設定した。

「生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現できるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導力（その時、その場でどのような行動が適切であるか自分で考えて、決めて、実行する能力のこと）の育成を目指すものです。そのために、日々の教育活動においては、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの3点に留意することが求められています。」（生徒指導提要平成22年3月文部科学省）とある。これらの生徒指導の3機能を意識した授業づくり、集団づくりに向けてアプローチすることを今年度の自身のテーマに定め、研究・実践していきたいと考え、本主題を設定した。

② 児童の実態から（第5学年3組児童 男子22人、女子21人、計43人）

5月に実施された「i-check」における本学級の児童の結果は以下のとおりである。(表1～表4)。この結果から分かるように、「授業中自分の考えを発表するとき、考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表しているか」という問いに対して、クラスの約半数の児童は発表の仕方の工夫が十分ではないことが分かる(表1)。また、他の人の発言に対して質問をできないと回答した児童が60%を超えている(表2)。その理由として、「自分の考えに自信がもてないから発表できない」も「発表の仕方の工夫が分からない」「質問が思いつかない」ということを多数の児童が挙げている。また、意識調査の「自分は先生から期待されている、友達から頼りにされていると感じることがあるか」という問いに対しても肯定率の低さが見られた(表3)。この結果から、児童の自己肯定感の低さやクラスの中での自己有用感の低さが伺える。関連して、意識調査の「クラス全員の一人一人のいいところを言葉にして言うことができますか」という質問の肯定率も69%と低かった(表4)。互いのことを深く知らず、仲のいい児童のみとつながっていること、集団の中で自分のよさを発揮できていないと感じていることが分かる。

意識調査から明らかになった課題を受け、本学級の児童にとって、授業をととして、友達とつながり合い、安心して発言できる集団づくりを行うこと、互いを知り、尊重し合える関係を築けるような集団に向けた具体的な取組が必要であると考え、本研究主題を設定した。

(2) 研究主題の分析

①「生徒指導の3機能」の解釈

日常の教育活動の中心となる各教科の授業において、生徒指導を機能させていくことで、児童の学ぶ意欲を引き出すと同時に、一人一人の自己指導能力(図1～図2)と安心して学べる集団を育むことへつながると考える。

自己決定の場を与え、自己の可能性の開発を支援すること

児童が自らの行動を決断し、実行し、責任をもつという経験をととして、自己指導能力の育成が図られる。学校は児童が自らの可能性を発見し、伸長できるように、適切な経験の場や活動の場を設け、自己決定の場をできるだけ多く用意し、他者とかかわりの中で児童が判断力を高め、責任のある行動をとれるように支援することが重要である。

自己存在感を与えること

児童一人一人の存在を大切にすること。人間は、他者とかかわりの中で自己の存在感を見い出せるとき、生き生きと活動できるのであり、児童が自己存在感を得ることにより自己実現を図ることができる。よって、指導者は、児童一人一人の独自性や個別性を大切にしながら、様々な学校生活の場でそれぞれが自己存在感をもてるように指導を進めることが重要である。

共感的人間関係を育成すること

相互に人間として無条件に尊重し合う関係であり，ありのままに自分を語り，理解し合う人間関係。このような中にいることで，児童生徒自身の自己受容・自己理解は高まっていく。

これらを踏まえて，生徒指導の3機能を意識した授業づくりのチェックポイントを設定し，意識的に授業の中に取り入れていくことにした（図3）。

② 人・学習内容とつながる児童とは～集団づくりと意識調査の実施～

一人一人違った個性・生活背景をもっている児童を丁寧につないでいくことにより，次の3つのことを実現することが集団づくりであると考える。

- 一人一人の（どの児童も）もっている多様な個性が輝き合うこと
- 児童が互いの存在を尊重しながら，信頼関係を結ぶこと
- 結ばれた信頼関係の中で，さらに互いの成長を子供たち自身が実感すること

集団（のまとまりや行事の成功）をつくるために行うのではなく，一人一人の児童の成長のためにこそ集団づくりを行っていくことが大切である。また，集団づくりは，授業をはじめとする学校生活すべての中で取り組むものであると考える。本研究では，集団の伸びや課題を捉えるために i-check を参考にした意識調査を作成し，年5回にわたり実施していく（図4）。児童の意識調査を基にして授業及び集団づくりの指導の改善や取組を行うことで，児童と教師の双方の思いが日常生活に反映され则认为る。

（3）研究の仮説

教科指導において，「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」の生徒指導の3機能を意識した授業づくりを行うとともに，定期的な意識調査を基盤とした集団づくりにむけての実践を行うことで，主体的に学ぶ意欲を高め，人や学習内容とつながろうとする児童を育成することができるであろう。

（4）研究の視点

研究の仮説を検証するために，以下の視点と具体的方策を設定した。

視点1 生徒指導の3機能を意識した授業づくり

- ① 「自己決定の場を与える」取組
- ② 「自己存在感を与える」取組
- ③ 「共感的人間関係を育成する」取組

視点2 人とつながる集団づくり～意識調査の結果を基にした取組～

- ① 特別活動の充実をとおした取組
- ② 「つながり」を意識した日常的な取組
- ③ 「思いを受け止める」人権教育の推進をとおした取組

（5）研究の構想図（図5参照）

3 研究の実際

視点 1 生徒指導の 3 機能を意識した授業づくり

①「自己決定の場を与える」取組

ア 総合的な学習の時間～「地球環境プロジェクト」における実践より～

本単元において、地球環境問題を自分事として捉え探究していく中で、2つの課題が見られた。1つ目は「児童が自分で課題を設定し、見通しをもって主体的に学習に取り組むこと」。2つ目は「情報の整理・分析の段階において他者と協働しながら自分の考えをまとめ整理していくこと」である。そこで「自己決定の場を与える取組」として、主に2つの取組を行った。

- 1 探究のプロセス・単元のゴール（実践化）を児童に選択させたり決定させたりする場を設定すること（課題・方法・形態の選択）
- 2 ピラミッドチャートや座標軸などの思考ツールを活用することで思考の可視化を図る。（個人の考えを話す場の設定）

「児童が自分で課題を設定していく力」や「ゴールに向かって主体的に探究していく力」を育成することをねらいとして、学びのプロセスの大枠（図6）を全体で共有した後は、各チームのリーダーを中心に探究の方法や課題の整理の仕方などを、児童が主体となりまとめていくようにした（図7）。このように探究のプロセスを、自分たちで意思決定していく場面を多く設定することにより、探究の中から新たな課題を見つけていくことへとつながった（図8）。また、探究のゴール（行動化）を、議論しながら自分たちで決定していく思考活動を単元に位置付けることで、決められたゴールに向かうのではなく、探究や思考活動の中で生まれた課題や学びからそれぞれの立場で考えを出し合い、ゴールには何がふさわしいかを主体的に話し合う姿が見られた（学習構想案1）。

次に、「情報の整理・分析」の学習場面において、他者との比較・交流を通して他者理解力を育み、新たな気づきや自分の考えを異なる視点から多面的に捉えることをねらいとして、思考ツールを活用した授業実践を行っていった（図9）。これにより、自分たちの行動を決定するために思考し、他者との比較・交流を通して新たな気づきや自分の考えを異なる視点から多面的に捉えることへとつながっていくと考えた。また、キーワードを可視化することによって、全員が話し合いに参加できるようになり、キーワードを操作することで自分自身との関わりを意識し、自分事として捉える効果も期待できると考えた。このように、自分の考えの根拠をもって説明する表現活動を繰り返すことで、思考の深まりが生じ、意思決定力や他者理解の力が相互に関連し合いながら育成されていくと考えた（図10）。

イ 国語科「読むこと」における実践より

国語科の「読むこと」の学習を進めていく中で、「根拠をもとに考えをまとめる力」「他者と自分の考えを比べたり質問したりする力」「自分の学びを振

り返り，次時へ活かす力」を育成することの必要性を感じた。そこで，「自己決定の場の工夫」として以下の実践を行った。

- 1 個人思考の時間の確保・ノート指導の工夫
- 2 自分と他者との考えを比較するための一覧表やテキストマイニングの活用による学び合いの授業の実践
- 3 振り返りを次の学びへ活かすための1枚ポートフォリオの活用

物語文の学習では，自己決定の場の設定のチェックポイントの「個人で考える時間を取る」「個人の考えを話す場を設定」に重点をおいた。ノート指導については，図 11 にあるように，4 月から継続して「考え」→「根拠」というように書き方を統一した学習を繰り返すことで，考えと根拠を整理して書くことを行っていた。そして，4 月の「名前つけてよ」や 10 月の「たずねびと」の学習では，「互いの考えを他者と比較したり質問したりする力の育成」に向けて，自分の考えと友だちの考えと重ねたり比べたりしながら学ぶことへつなげることをねらいとして，全員の初読の疑問や感想を一覧表にし，考えの共有を図った（図 12～図 13）。また，板書ではネームプレートやイメージマップ活用し全員の考えを分かりやすく提示した（図 14）。自分の考えと友達の考えを一目で知ることができ，互いの考えに対する質問や，自分の考えとその根拠を相手に伝えるための発言の工夫も見られるようになった。また，伝記「やなせたかし」の単元においては，児童の初読の考えをワークシートとテキストマイニングの 2 つで整理した（図 15）。このことにより，考えを簡潔な言葉で表すことができ，主人公はどんな生き方を大事にしていたのかという問いに対する自分や友だちの考えを意識して学習を進めていくことへとつながった。こうすることで単元の終末では，全員が自分の考えと根拠をもって学び合いを行うことができ，自分の考えと友達の考えや根拠を比べながら，考えを再構築していく姿が見られた（図 16～17）。

そして，自分の学びを振り返り次時へ活かす力の育成に向けて，自己決定の場の工夫として，「思考過程がわかる振り返りの工夫」として，1 枚ポートフォリオを作成した（図 18）。単元全体の振り返りを 1 枚にまとめることで前時の自分の学びと比べながら本時の振り返りを行うことができ，単元を通して自己の学びのプロセスを児童自身が確認できるようにした。ある児童の振り返りに，「今日見出しを付けるのが難しかったのは，あまり読み取りができていなかったから。」と書かれていた。この児童は出来事の読み取りがうまくできていなかったことが見出し作りに影響していることに気づき，その日の家庭学習で同じ資料を使い，出来事の読み取りを再度行った。次の時間の「出来事の意味」を読み取っていく学習の振り返りでは，「自学で読み取りをもう一度確認したから，今日の出来事の意味を考える学習が書けてよかった。」と自己の学びを振り返ることができていた（図 19）。ふり返りを通してできなかったことの原因を自分なりに探り，家庭学習で自ら補充を行い，次の学習へとつなげることができた。

ウ 対立意見や多様な考えを生む問いの工夫～道徳科における実践～

「自分の考えを確立し、他者と比較しながら質問しながら考えを再構築する力」の育成を目指し、道徳科では「問いの工夫」を行った。内容項目「正直・誠実」の教材「手品師」の学習においては、全員が考えをもち（選択し）、互いの考えに対する質問や、相手を納得させるための発言の工夫などが学び合いの中で発揮できるよう、「あなたが手品師なら A 一人の男の子との約束、B これまでおいけてきた夢のどちらを選びますか？」という二極対立型の問いを設定した（図 20）。また、内容項目「友情、信頼」の「ドッジボールを百倍楽しくする方法」の実践では、多様な考えを出し合うことで、自らの考えを広げることをねらいとして、「本当につながり合う友達になるためには何が大切なのだろうか。」という拡散型の問いを設定した。それぞれの思考活動の場面では、〇〇さんの考えは誰の考えと似てるかな？など児童と確認しながら板書していくことで、自分の考えと友達の考えの似ているところや根拠のちがいを比べながら考えを広げたり深めたりすることへとつながっていった（図 21～22、学習構想案 2）。他の教材においても、全員が考えをもち、相手に対する質問を持つことや納得できるような発言の工夫につながっていくことをねらいとして、二極対立型や拡散型に加え、選択制の問いを設定するなど、教材に応じた問いの工夫を行っていった（図 23～図 24）。ふり返りでは自分と異なる考えの根拠を聴き合いながら自らの考えを再構築していく記述が多く見られた。

ウ 学習方法や形態を選択し、安心して学べる算数科における実践

算数科の学習では、理解や説明する力において個人差が大きく、学びが苦手な児童が考えをもつことが難しいという課題があった。そこで、全員が安心して学ぶことができ、発表したり説明したりする活躍の場面を多く設定することをねらいとして、学習形態を児童に選択させながら学習をすすめていくという取組を行った。毎時間の問いに対して、個人で考えるか、ペアで考えるかを児童と対話しながら選択できるようにすることで、「今日はちょっと難しいからペアで考えたい」「自分で解決できる人多そうだから一人で考えた後共有したい」など児童も課題に応じてどんな形態がよいのかを考えることができていった。また、ペア学習が一方的な教え合いにならず、双方の能力を高めるために、ペアリングは教師が行い、ペア学習のルール（苦手な子の方が最初の説明者になる、答えのみでなく過程の説明も考えるなど）を設定した。理解が早い子も学びが苦手な子も活躍でき、授業をとおして安心して学べる集団づくりへとつながっていくと考えた（図 25）。

②「自己存在感を与える」取組

ア 全員に役割がある授業～総合的な学習の時間の実践より～

4 頁で述べた「地球環境プロジェクト」の学習において、グループでの探究活動を続けていく中で、「一人一人が明確な役割をもち、情報収集能力・表現力を高めていくこと」が課題となった。そこで、以下の取組を行った。

- | |
|----------------------------------|
| 1 グループ内での個人の役割を明確にした学習の流れを確立すること |
| 2 全員に「伝える・聴く」役割のある発表の形式をとること |

課題に応じた情報の収集能力の育成と、グループ内で全員が役割を実感しながら探究をすすめることをねらいとして、学習の流れを個人による情報収集→チームでの共有・整理分析→全体での共有という形態をとるように工夫した。時間内で調べたことをチームに持ち寄り、みんなで整理することで、自分が収集した情報がチームの役に立っているという意識をもつことにつながっていくと考えた（図 26）。

また、「グループ学習の中で、一人一人の表現力」を高めるため、探究の中間発表の場面において、全体での発表会の形式ではなく、自由に互いの考えを聴き合うことができるポスターセッション形式を取り入れた。こうすることで、誰がどの部分をどのように伝えるのかをチーム内で役割分担したり、発言が苦手な子も発表できるよう、チーム内でリハーサルを行ったりする場面が生まれた。発表会ではそれぞれの良さを生かした多様な表現方法や工夫が多く見られた（図 27）。また、少人数による伝え合いということもあり、自然に質問をし合ったり感想を伝え合ったりする児童も多く見られた。発表を聴く側もどのチームの話の聴きたいかを自らの意思で選択しながら学習を進めることができるのもポスターセッション形式のよさである。

複数人で学習を進めていく際には、置いてきぼりになる児童がいないように、全員が明確な役割をもってゴールに向けて探究ができるような環境の設定を行うことが自己存在感を与えることにつながると考えた。

イ 「多様な考えを認める」～算数の学習より～

6 頁のウで述べた学習形態の選択により、算数の学習では一つの解き方ではなく、既習を活かした多様な考え方で解こうとする姿が見られるようになっていった。自己存在感を与えるための取組として、「多様な考えを認める」ために考えを共有する時間を十分に確保するようにし、説明する経験を増やしていった。その際は解き方やその説明の仕方などを認め、賞賛していくことで一人一人が安心して伝え合うことができるようにした（図 28）。

ウ 「賞賛や励ましの言葉を与える」～毎時間の机間指導より～

様々な教科における個人思考の場面では、児童が安心して考えを書いたり情報の整理をしたりすることができるよう、必ず机間指導で全員の考えに目をとおり、赤でチェックを入れたり、声かけをしたりするように心がけた。毎時間の机間指導によって一人一人の考えや学習状況の把握をしたり手立てを講じたりすることが、安心して学べる環境へとつながると考えた。また、できない児童だけでなく、理解が早い児童にも新たな課題を個別に出すことで、時間を持て余すことがなくなり、静かな環境で学ぶことができた。加えて、児童が書いた作品や作文、自学ノートなどには、教師の思いを入れながら賞賛の言葉を必ず添えるようにし、伸びや努力を価値付けすることで自己存在感を感じることにとつながりたいと考え、実践している（図 29）。

エ 全員が授業に参加できる配慮をする

学力差が大きい児童も、主体的に学ぶことができるよう、授業中は個人思考の時間にヒントカードを提示（図 30）したり、教科書にルビをふったりした。また、机間指導の際に、「計算はできなくても立式はやってみよう」というように具体的に目標を提示することでできることを増やすよう心がけた。また放課後を利用し、既習の学習の復習を継続して行った。授業に安心して学ぶことができるような手立てや声かけを続け、補充学習で基礎力の定着に向けた取組を継続することで、学ぶ意欲の高まりや基礎・基本の伸びにつながると考えた。

③ 共感的人間関係を育成する

ア 「聴く」ことを大切にする授業づくり

相手の話を「聴く」ことは共感的な人間関係を形成するにあたり欠かせないことである。本学級では、「発表する人の方を向く」「頷きや反応を返しながらか相手の話を聴く」ことを徹底し、授業の際は繰り返し、指導を行ってきた。また、授業の際に発言をつないでいく場合（児童による相互指名の際）はハンドサインを活用した（図 31）。「他にもあります」「似ています」「付け加えます」「質問があります」など互いの考えを聴きながら意見を出したり、質問し合ったりすることができるようにした。ハンドサインは様々な教科の学習や学級会などで活用し、互いの話を「聴く」意識も高まっている。

イ 「教師主導にならない配慮」～学習リーダーを中心とした学び合い～

授業において多様な考えを出し合う場面では、学習リーダーを教師役にし、学び合いを行うようにした（図 32）。この取組により、児童に学習の主体者であるという自覚をもたせることにつながり、自分たちの手で授業を進め、自分たちの手で課題を解決するという意欲を高めることへとつながると考えた。リーダー役の子は、授業の中で集団を束ねていくリーダーシップと主体性を学び、フロアの児童も全員が意見を出し合い、力を合わせながら連携が取れなければ課題解決に達成することができない。誰に当てるか、誰がまだ考えを出せていないかなど一人一人が相手の気持ちを考えてコミュニケーションを取ることで思いやりの心が育まれ、協力すること、共感的人間関係の育成を図った。授業の様々な場面において自分たちで作り上げる経験を意図的に設定することで、学習中のルールの大切さやそれぞれの役割分担、対人スキルなどが高まっていくと考えられる。

視点 2 人とつながる集団づくり～意識調査の結果を基にした取組～

① 特別活動の充実をとおした取組

本研究では、集団づくりに関する意識調査を 5 月、7 月、10 月、12 月、3 月（未実施）と計 5 回実施していく。この意識調査は児童の思いに寄り添い、学級経営、集団としての課題と成長点を児童側の視点から捉え、その結果を基に指導の改善を図ることを目的としている。

ア 学級会を通した取組

意識調査の質問④「あなたは、学校生活の中で他の人が発言したり発表したりするときに、質問をしていますか？」、質問⑤「自分の考えを発表するときは、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していますか？」において本学級は肯定率が低い結果にあった。学校生活における課題や自分たちの生活をよりよくしていく考えを出し合う学級会の取組を充実させることで、学力差に関係なく、互いの考えに質問し合ったり、自分の考えを伝えるための工夫をしたりする力が高まると考えた。また、全員の前で発言することへの自信にもつながると同時に議論したことを実践化することで集団の自治的能力も育むことができると考えた(図 33)。

学級会における学習過程は、「個人の考えを出す」→「話合いのめあてを立てる」→「質問」→「議論・決定」という分かりやすい道筋になっている。考えを出し合う際は、思考ツールのブレインストーミングを活用し、互いの考えを可視化することで質問がしやすくなっていった(図 34)。また合意形成においては、ハンドサイン(図 31)や聴き合うことの大切さを確認しながら進めていくことで、自分の考えと相手の考えの相違点を比べながら発言する順番を工夫し、伝わりやすく話そうと具体例を述べながら発言する児童も増えた。このように集団決定したことを計画し、実施し、振り返りを行うことで「誰かの役に立っている」という自己肯定感を高めることへもつながった。学習構想案 3 にあるように、低学年に楽しんでもらうための活動では互いに協力し合い、2 年生に楽しんでもらうための夏祭りを成功させようとする姿が見られた(図 35)。「ALT とのお別れ会に何をするか」、「高学年として学校のためにできること」「学級のルールづくり」など、自分たちの生活に直結する課題を、学級会において合意形成を行うことで、自治的能力と同時に集団に対する帰属意識の高まりを育むことへとつなげていきたいと考えた。

イ 自己有用感を高めるプラス 1 の係活動

質問項目⑩「自分は先生から期待されている、友達からたよりにされていると感じたことがありますか？」に対する 5 月の意識調査において、約 43% の児童が期待されていないと回答していた。そこで、集団の中で自分のアイディアが活かせる係活動、自分たちで集団を動かすことができる係活動を児童のアイディアを基に実現していった。学習リーダー係は、宿題の答え合わせ等の日常活動に加えて、みんなが苦手な教科や単元の宿題づくりを行った。宿題作成にあたっては教科アンケートを実施して分析をし、集団の実態に合ったものを作成しようと工夫が見られた(図 36)。また、体育係は、元々の役割に加えて、移動教室(担任外の教科の授業)の際のクラスの学習態度のチェックを行った。花丸がたくさんたまったら楽しいことをしようという活動を考え、実施し、クラスを盛り上げていた(図 37)。誰に対しても態度を変えないよいクラスを目指そうという目標をもちながら全員を巻き込み、楽しいことを考え実践し、リーダーシップを発揮していた。係の打ち合わせ・

連絡を毎日の朝の会で設定し、企画や話を繰り返すことで、係活動が学級の中で重要な役割となり、自分たちの役割を責任をもって果たそうとする態度や自己肯定感や自己有用感の高まりにつながると考えた（図 38）。

ウ 一人一人の良さを広める 1 分間ステージ

本校は毎年クラス替えが実施され、児童同士がお互いのことを深く知ることが難しい。意識調査の質問⑧「クラス全員の一人一人のいいところを言葉にして言うことができますか？」に対しても 5 月は肯定率の低さが現れていた。そこで週に 1 回ずつ一人一人の特技を披露する「1 分間ステージ」という時間を朝の会で設定し、実施していった（図 39）。一人一人が全員の前で特技を披露し、見ていた子から感想をもらうという時間を通して、お互いの意外な一面を知ったり、賞賛されたりする経験を重ねることで自己肯定感の高まりや表現力の向上、児童同士のつながりを深めることにつながると考えた。また、活動の様子を学級通信に掲載し、保護者にも啓発を行った（図 40）。

エ ミニ討論会を通した話し合う力・聴き合う力の育成

自分の考えを相手が納得するように主張すること、相手の考えを深く理解し、共感したり反論したりしていく力を身に付けること、また、話し方・説明の仕方や聴き方のスキルの育成に向けて、朝の会の時間を活用しミニ討論会を継続して行った。児童の身近な話題を児童が交代しながらテーマ設定をし、生活や実体験に基づいた根拠を持ちながら討論できるようにする。「〇〇さんは～と言いましたが」というように「つなげて」発言していくことを意識させ、司会をする日直は意見を集約しまとめる役を行う。このように日常的に楽しい雰囲気の中で話型や話のつなぎ方などを指導し、繰り返していくことで自分の思いを安心して出し合える集団づくりや相手の意見に対する質問や疑問をもつことにつながると考えた。毎回相手を交代していくことは、いろいろな人と関わり合う機会の設定にもつながっている。

②「つながり」を意識した日常的な取組

ア 毎日の日記を通した児童と教師のつながり

本学級は 40 人と 3 人の特別支援学級の児童の計 43 人が在籍している。毎日一人一人コミュニケーションを図る手段として、帰りの会で日記を書き、それに対して教師がコメントを返していくという取組を実施している（図 41）。日常の出来事やそれに対する思いを書く児童が多いが、中には困っていることやみんなの前で話せないことを書いてくる児童もいる。継続した取組を通して、「いつでも困ったときに担任は頼れる存在でありたい」という教師の思いを伝えることにつながると考えた。質問⑥「あなたの気持ちを分かろうとしてくれる先生がいますか？」の 5 月、7 月、12 月の肯定率の変化に見られるように、一人一人の思いに寄り添いたいという教師の思いを日々伝えていくことが大切である（図 42、図 43、図 44）。

イ 毎日の学級通信を通した保護者とのつながり

児童の活動の様子を保護者に伝えることで学校と保護者とのつながり、保

護者と児童との情報の共有を目的として、児童の様子や思い、写真などを毎日の学級通信で発行している（図 45）。保護者から見えにくい学校での児童の様子を知らせるとともに、家庭で保護者と児童が通信を通じて共通の話題でつながることができればという思いで継続して行っている取組である。

③「思いを受け止める」人権教育の推進を通して

本校は学期に 1 回（年間 3 回）の人権学習が教育課程に位置付けられている。年度当初から 12 月まで、互いを大切にする、受け止め合える、聴き合う集団づくりに向けて実践を行ってきた結果、7 月には見られなかった児童の姿が 12 月の人権学習の際に見られた。12 月に実施した「私は強く生きる」の語り合いの授業では、これまで出せなかった本当の思いを作文に書いたり、クラスの中で出し合ったりする姿が見られた。涙を流しながら自分の苦しかったことを伝える児童に対し、全員がしっかりと受け止め、思いを返していた（図 46）。「〇〇ちゃんが勇気を出して伝えてくれたから私も伝えたいと、これまでの人生で辛くて誰にも言えなかったことをこのクラスのみんなに伝えたい、聴いてほしい」と作文を改めて自宅で書いてきて発表する児童もいた。人権学習をとおして、友達の思い真剣に受け止め、自分なりに返していく集団づくりへとつながり、「本音で語り合うこと」「自己開示すること」が共感的人間関係を育んでいくのだと改めて感じた。

4 研究のまとめ

（1）児童の意識や実態の変容

12 月に児童の意識調査を実施した。5 月に行った質問の中で課題の大きかった「授業中、自分の考えを発表するとき、考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表しているか」に対しては、67.5%の児童が肯定的に回答している（表 5）。その理由として、「友だちと自分の考えの同じところや違うところを見つけながら話を聴くようになった」や「考えと根拠を分けて話すようにした」という理由が挙げられた。自己決定の場を与えるための個人の考えをもつための手立てや、友だちと自分との考えを比較しやすい板書の工夫、ハンドサインを用いた学び合いを行ったことにより、自分と他者との考えを比べながら聴き合う態度の育成へとつながった。また、学級会や問いを工夫した道徳の授業を通して自分の考えを相手に伝わりやすくするために、工夫して発言しようとする意識の向上が見られるようになったと考えられる。また、課題の一つであった意識調査④の質問に関しても同様のことが向上へとつながったと考えられる（表 6）。また、集団づくりの取組により、意識調査⑩の「自分は先生から期待されている、友だちからたよりにされていると感じることがありますか」についても 81%の児童が肯定的に回答しているという結果になった（表 7）。同様に「クラスの中で、だれかが困っているとき、その人を助けてあげよう、励ましてあげようとする雰囲気クラスにありますか」という質問に対しても向上が見られた（表 8）。授業

において自己存在感を与える手立てを行ったことで全員が学習に参加することへとつながり、賞賛や励ましによって自信がついてきたこと、特別活動の充実によって、自分はクラスに必要な存在だと実感できるようになってきたことが向上へとつながったと考えられる。一方で、一人一人のいいところが言えないと答えた児童が2人いたことは、真摯に受け止め、児童全員が学級の中で居場所を感じられるような取り組みを新たに考えていく必要がある。

(2) 研究の成果と今後の課題

視点1 生徒指導の3機能を意識した授業づくり

- 生徒指導の3機能を意識した授業づくり「チェックポイント」を活用し、それに基づく取組をすべての教科で行った。授業の中でどう集団を育てるかという視点をもつこと、集団づくりをいしきした単元構想を行うことができ、事後に児童の変化を適宜振り返ることで自らの指導の改善と児童の成長へとつながっていった。
- 学習の形態を児童に選択させたり、課題を自ら考え、探究のゴールを話し合って決定させたりと、自己決定の場を授業に多く設定したことにより、児童の学ぶ意欲が高まり、学習内容とつながり、友達と協力しながら学びに向かう姿が見られるようになった。
- 賞賛や励まし、発言しない児童への配慮を継続して行い、全員参加の授業を目指して自己存在感を与える取組を授業の中で行ったことで、児童が安心して「分からない」「できない」をつぶやける雰囲気ができ、ともに学んでいこうとする姿へとつながっていった。

視点2 人とつながる集団づくり

- 意識調査を計4回行い、データに基づいた分析・考察から課題を見付け、それらに対する取組を考えていくことで、よりよい集団づくりができると感じた。
- △まだまだ自分に自信をもてない児童も多い。集団に対する自己有用感の高まりに向けた実践だけでなく、個々の特性をその児童に応じた形で生かした取組を考え実践し、自己肯定感の高まりにつなげる必要がある。

5 おわりに

人は人との関わり合いの中で、自分を大事な存在と捉えることができ、互いに尊重し合う関係づくりも生み出せる。親子はもちろん、友達関係、学級集団、学校という集団、そして教師と児童の関わり合いが、児童の心を育てていくことにつながっていく。今、目の前にいる未来を担うすべての子供たちが、自分自身や他者を大切にしようという思いをもち、意欲的に学び、自己実現を図ってほしいと願う。そのためにも、子供が自分なりに少しずつでも自信を高めていけるような関わり合い、あたたかな学級集団づくり、目を輝かせて意欲的に学ぶ授業を目指していきたい。

教育論文

意欲的に学び，人・学習内容とつながる児童の育成
～ 生徒指導の３機能を意識した授業づくりをとおして ～

資料

意欲的に学び、人・学習内容とつながる児童の育成
～ 生徒指導の3機能を意識した授業づくりをとおして ～

資料

表 1

「授業中自分の考えを発表するとき、考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していますか？」

選択肢	1 当てはまる	2 どちらかと言えば 当てはまる	3 どちらかと言えば 当てはまらない	4 当てはまらない	肯定率
本学級	16.7%	33.3%	35.7%	14.3%	50.0%
全国	18.5%	37.9%	31.8%	10.6%	56.4%

表 2

「あなたは学校生活の中で他の人が発言したり、発表したりするときに、質問をしていますか？」

選択肢	1 よくしている	2 ときどきしている	3 あまり質問しない	4 質問しない・ 思いつかない	肯定率
本学級	11.9%	21.4%	38.1%	28.6%	33.3%
全国	11.9%	28.8%	39.3%	19.9%	39.9%

表 3

「自分は先生から期待されている、友達から頼りにされていると覚えることがあるか」

選択肢	1 よくある	2 ときどきある	3 あまりない	4 まったくない	肯定率
本学級	16.7%	40.5%	28.6%	14.3%	57.1%
全国	19.4%	39.1%	28.1%	12.4%	58.5%

表 4

「クラス全員の一人一人のいいところを言葉にして言うことができますか」

選択肢	1 みんな言える	2 だいたい言える	3 仲のいい子だけ	4 ほとんど言えない	肯定率
本学級	31.0%	38.1%	19.0%	11.9%	69.0%
全国	31.8%	44.5%	17.4%	5.3%	76.3%

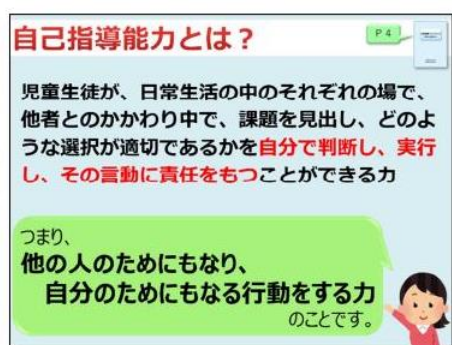


図 1 自己指導能力について

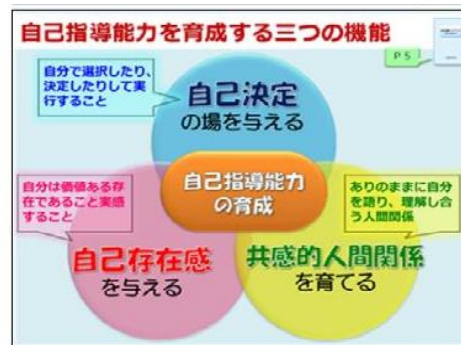


図 2 生徒指導の3機能と自己指導能力

**意欲的に学び、人・学習内容とつながる児童の育成
授業づくりのチェックリスト**

番号	観点	めざす児童の姿・教師の手立て	チェック欄	授業改善に向けて
1	集団づくり [共感的な態度]	共感的な態度で話す人の話を聴いているか。	☐	
2	集団づくり [違いの尊重]	互いの失敗や間違いを認めたり、考えの違いを大切にしたりしているか。	☐	
3	集団づくり [学習規律]	安心して学ぶことができる学習環境の設定やルールづくりができているか。(教師の手立て)	☐	
4	授業づくり [主体的な姿]	課題の解決に向けて、自ら考え主体的に取り組んでいるか。	☐	
5	授業づくり (分かる授業) [表現の工夫]	考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなど工夫して発表しているか。	☐	
6	授業づくり (分かる授業) [質問や返し]	発言や発表に対して、互いに質問し合えるような場面設定を行っているか。(教師の手立て)	☐	
7	授業づくり (分かる授業) [学びの実感]	終末場面では「分かった!」「できた!」を実感し、次の学びへの意欲へとつながっているか。	☐	
8	授業づくり (全員参加の授業) [子供への手立て]	学びが苦手な子供に対しての手立てや支援を行っているか。(教師の手立て)	☐	

教師自身による生徒指導の3機能を意識した授業づくりチェックリスト

番号	観点	重点取組	チェック欄	改善に向けて
1	自己決定の場 を与える	【 】 を行う。	☐	
2	自己存在感 を与える	【 】 を行う。	☐	
3	共感的人間関係 を育成する	【 】 を行う。	☐	

図3 生徒指導の3機能を意識した
授業づくりのチェックポイント

笑顔とやる気 っ子アンケート

年 組 番 ()

みんなが笑顔とやる気であふれる太田郷小学校になるためのアンケートです。
授業やクラスの様子について答えてください。

① 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいると思いますか？	☐ 当てはまる。 ☐ どちらかと言えば当てはまる。 ☐ どちらかと言えば当てはまらない。 ☐ 当てはまらない。
② 先生は授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれますか？	☐ 当てはまる。 ☐ どちらかと言えば当てはまる。 ☐ どちらかと言えば当てはまらない。 ☐ 当てはまらない。
③ クラスの人がふざけたり、おしゃべりをしたりして授業に集中できないことがありますか？	☐ 一度もない。 ☐ ほとんどない。 ☐ ときどきある。 ☐ よくある。
④ あなたは、学校生活の中でほかの人が発言したり発表したりするときに、質問をしていますか？	☐ よく質問している。 ☐ ときどき質問している。 ☐ あまり質問しない。 ☐ 質問しない・質問が思いつかない。
⑤ 授業で、自分の考えを発表するときは、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していると思いますか？	☐ 当てはまる。 ☐ どちらかと言えば当てはまる。 ☐ どちらかと言えば当てはまらない。 ☐ 当てはまらない。
⑥ あなたの気持ちを分かろうとしてくれる先生がいますか？	☐ よく分かってくれる先生がいる。 ☐ だいたい分かってくれる先生がいる。 ☐ いるけどわかってくれない。 ☐ いない。
⑦ 自分なりにがんばったことを先生が認めてくれて、うれしかったことがありますか？	☐ とてもうれしかったことがある。 ☐ 少しうれしかったことがある。 ☐ ほとんどない。 ☐ 一度もない。
⑧ クラス全員の一一人のいいところを言葉にして言うことができますか？	☐ みんな言える。 ☐ だいたい言える。 ☐ 仲のいい子だけ。 ☐ ほとんど言えない。
⑨ クラスで冷やかされたり、からかわれたり、いやなことをしつこく言われたりすることがありますか？	☐ 一度もない。 ☐ 前はあった。 ☐ 何とも言えない。 ☐ 今もある。
⑩ 自分は先生から期待されている、友だちからたよりにされていると感じることがありますか？	☐ よくある。 ☐ 時々ある。 ☐ あまりない。 ☐ まったくない。
⑪ クラスの中で、だれかが困っているとき、みんなでその人を助けてあげよう、はげましてあげようとする雰囲気があるあなたのクラスにはありますか？	☐ とてもある。 ☐ まあまあある。 ☐ あまりない。 ☐ まったくない。

亡まっていることや話したいことがあれば書いてください。

図4 i-check を参考にした意識調査
(年5回実施)

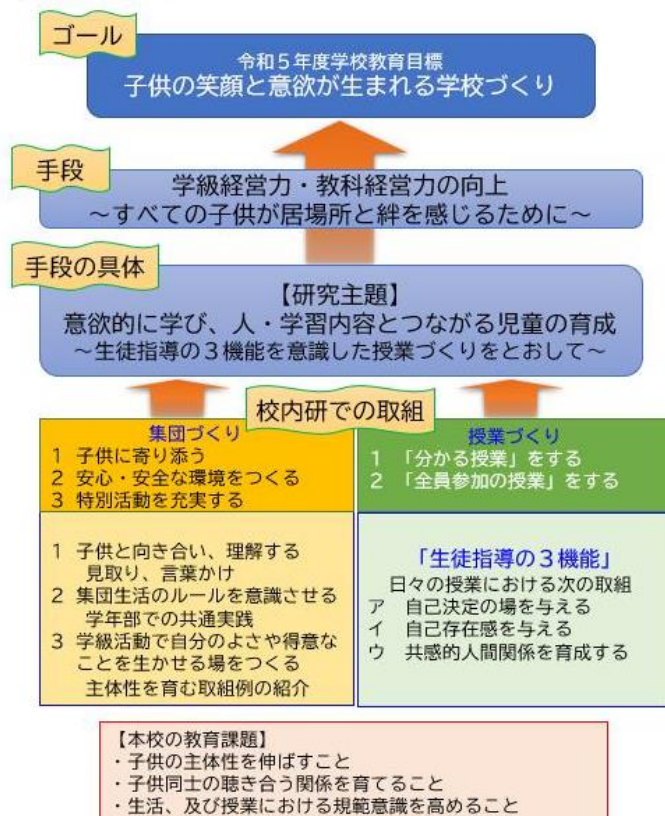


図5 研究の構想図

学習構想案 1（総合的な学習の時間）

第5学年3組 総合的な学習の時間 学習構想案

日時 令和5年6月27日（火）第4校時

1 単元について

「地球環境プロジェクト～100年後の地球のためにわたしたちに何ができるだろう～」

児童の姿	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
単元（題材）の目標	① 今までの学習を振り返り、現在の環境問題について知ることができる。また、環境を守ることが、自分たちの将来の生活につながっていることを理解できる。 ② 相手や目的に必要な情報を収集することができる。	① 「100年後の地球を守る」ための活動について、見通しをもって計画を立て、情報を比較、分類、関連づけるなどして整理することができる。 ② 探究したことを実践し、活動の様子や考えをわかりやすく工夫して伝えることができる。	① 環境への意識を高め、自分にできることを考え、実践することができる。 ② 友達と協働し、お互いの良さを生かしながら学び合い、課題解決に向かうことができる。
目標に向かうための手立て	○本校の研究内容（生徒指導の3機能を意識した授業づくり【案】）等に係る取組。 【自己決定の場を与える】 ・グループで話し合ったことをまとめる際は、ピラミッドチャートや座標軸などの思考ツールを使うことで思考の可視化を図る。（ 個人の考えを話す場の設定 ）（ 課題・方法・形質の選択 ） ・体験的な活動の内容をグループ、全体で検討し決定・実践することで、児童の主体性を育み、環境問題を自分事として捉えながら活動できるようにする。（ 体験的な活動 ）（ 課題・方法・形質の選択 ） 【自己存在感を与える】 ・発表の際は、学習リーダーを中心に児童主体でポスターセッションを進めていく。発表の視点を提示することでグループごとに互いの意図を伝えたり質問したりできるようにする。（ 全員が授業に参加できる配慮 ） ・4つの単元を通しての思考や情報収集では、個人→グループ→全体での共有という形態をとることで、一人一人が課題解決に向けて責任感・使命感を持って取り組むことができるようにする。（ 役割分担を決めて、一人一人追究に参加 ） 【共感的人間関係を育成する】 ・学習を振り返る時間（考えを再度まとめる、感想、自分の実感をまとめる）を適宜設けることにより、児童の考えの深まりや広がりなどの学びの状況をつかむことができるようにする。（ 児童生徒の意見を傾聴する ） ・探究グループでの発表の場を多く設定することで、聞き方・伝え方の徹底を図る。（ 発表をつなげ、集団で学び合う ） 【ICTの効果的な活用】 ・タブレット端末を活用し、教師が配付した資料や児童が用意した資料を比較・関連付けながら主体的に学びを進めていくようにする。		
児童の実態	① 単元の目標に係る実態。 ・環境問題への関心は高いものの、原因や対策などの諸問題に対しての知識や内容の理解には個人差が大きい。また情報収集の方法や集めた情報の整理の能力に課題があるため、思考ツールを活用しながら定着を図りたい。単元の設定においては体験活動と全体での思考活動を交互に位置付けながら学習活動を展開していくことにより、自らが設定したゴールに向かって主体的に探究活動が行えるように促していきたい。 ② 研究主題に係る実態。 ・本学級の児童は、意欲的に学びに向かい、自らの考えを持ちながら他者と交流したり共感したりすることができる児童が多い。友達の発言に耳を傾け、聴く姿勢を大切に授業に臨むことができる一方、一部の児童の発言に頼っている場合も多く、全員が自分の思いや考えを出し合う場の設定が必要である。そこで学習形態を個人→グループ→全体とし、表現方法をポスターセッション形式にすることで全員が役割と責任を持ちながら授業に臨み、相手を意識して工夫して発表する・聴く・共感する・課題設定といった能力を高めていけるようにしていきたい。		

単元の評価規準		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 環境問題についての現状と問題の原因、自分にできる解決策を理解している。 ② 探究の目的や相手に応じて手段を選択しながら情報を収集している。	① 課題を設定したり活動の計画を立てたり、収集した情報を整理・分析したりしている。 ② 探究したことや自分の考えをまとめ、相手や目的に応じて分かりやすく工夫して伝えている。	① 地球環境を守る一員としての意識を高め、自分にできることを考え、実践している。 ② 自分と異なる意見や考えの良さを生かしながら協働して学び合い、課題解決に向かっている。

(小単元1) 指導と評価の計画 (35時間取り扱い 本時8/35)				
課題	次	時	主な学習活動	評価の観点と方法 ★記録に残す評価の場面で「具体的評価規準」を示す
100年先も持続可能な地球にするために私たちにできることは一体なんだろう。	1	1	○地球環境問題について課題意識をもつ。	【主】①(学習シート・行動) 地球環境を守る一員としての意識を高めている。
		2	○単元の学習計画を立てる。	【思】① 課題を設定したり活動の計画を立てたり、収集した情報を整理・分析したりしている。
	2	3	○課題別で地球環境問題について調べ、プレゼンテーションを作成する。	【知】① 環境問題についての現状と問題の原因、自分にできる解決策を理解している。
		4		【知】② 探究の目的や相手に応じて手段を選択しながら情報を収集している。
		5		★【思】②(ノート・発言) 探究したことや自分の考えをまとめ、相手や目的に応じて分かりやすく工夫して伝えている。
	3	6	○学習グループでプレゼンテーションを発表する。 まとめ・お礼	★【主】②(ノート・発言) 自分と異なる意見や考えの良さを生かしながら協働して学び合い、課題解決に向かっている。
		7		
		8		
	ふり 返し	9	○自分たちにできることを考え、実践するための準備を行う。(新たな課題づくり)	【主】① 自分たちにできることを考え、実践している。
		10		

2 本時の学習

ゴールに何の活動をするかの思考活動の位置付け

(1) 目標

課題別グループで探究してきたことをもとに、「100年先も持続可能な地球」を目指して自分たちに取り組めること(イベント)を考え、提案することができる。

(2) 展開

過程	時間	学習活動 ☆予想される児童の発言	指導上の留意事項 (学習活動の目的・意図・内容・方法等)
導入	5	1 前時までの学びを振り返る。 2 「ゼロカーボンブック」から熊本県の取組を知る。 3 本時のめあてを立てる。	・前時の振り返りを紹介し、本時の学習につなげる。 ・熊本県の取組を紹介することで、実践への意欲につなげるようにする。 ・教師の提示した取組の問題点を指摘させることで本時のめあてにつなげる。
		本時のめあて 自分たちが今取り組めること(地球環境プロジェクト1)を考えよう。	
展開		【学習課題】地球環境問題の解決の一步として、みんなで協力してできることはなんだろうか。	
	30	4 環境プロジェクト1を考える。(個人)	・考えを持つことが難しい児童には机間指導を行い、ヒントカードを提示し、たくさん取組の中から選択することができるようにする。 ・グループごとにピラミッドチャートなどの思考ツールを活用し、意思決定を図る。 評価・思・判・表(行動観察・学習シート) 【B基準】環境問題解決に向けての取組を、根拠を持ちながら考えることができる。 【A基準】環境問題解決に向けての取組を、根拠を持ちながら考え、他者の考えと自分の考えを結び付けて
		5 グループで共通して行う取組を決定する。(グループ)	
		【意思決定を図るための視点】 ① みんなができることか。 ② 環境問題解決につながるものか。 ③ 継続してできることか。	
		6 ポスターセッションをする。	
		7 感想を交流する。(全体)	
		8 本時の学習を振り返る。	
	10	9 新たな課題を知る。	
終末			・視点に沿って本時の学習を振り返らせ、実践への意欲を高める。 ・総合的な学習の時間に実践できるように、更に詳細な提案が必要であることを伝える。

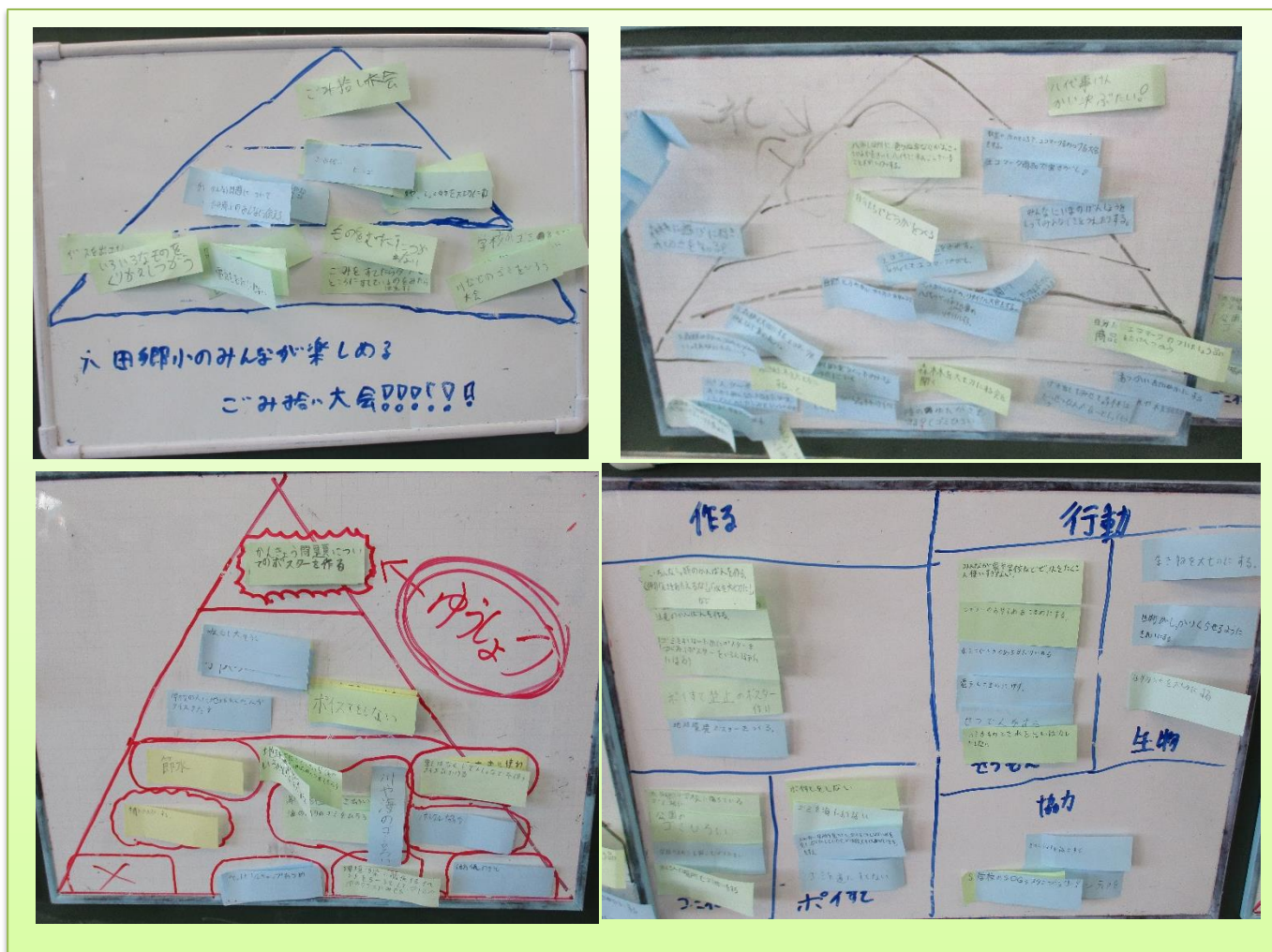


図9 思考ツールを活用した授業実践



図10 思考活動の授業の板書

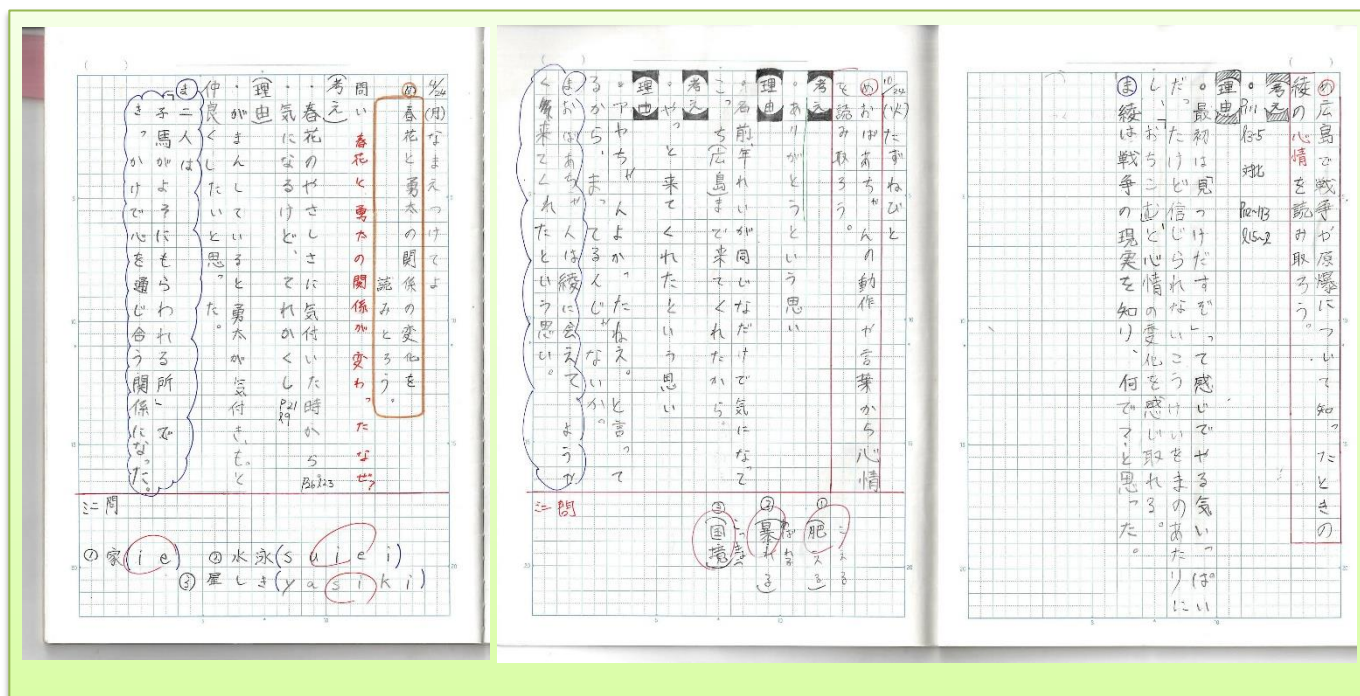


図 11 「考えと根拠をまとめた児童のノート（左 4 月，右 10 月）」

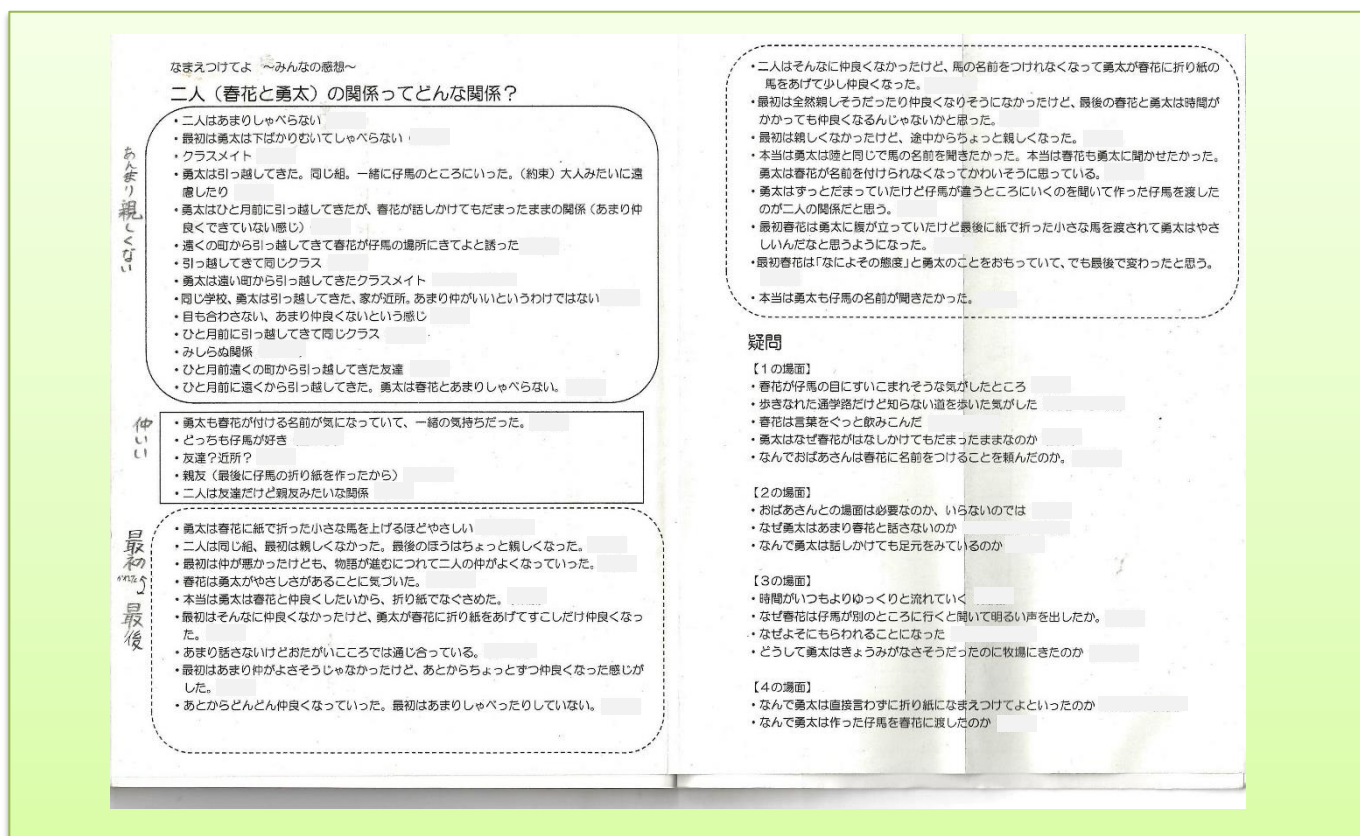


図 12 4 月「なまえつけてよ」の学習の初読の感想の一覧表（児童のノート）

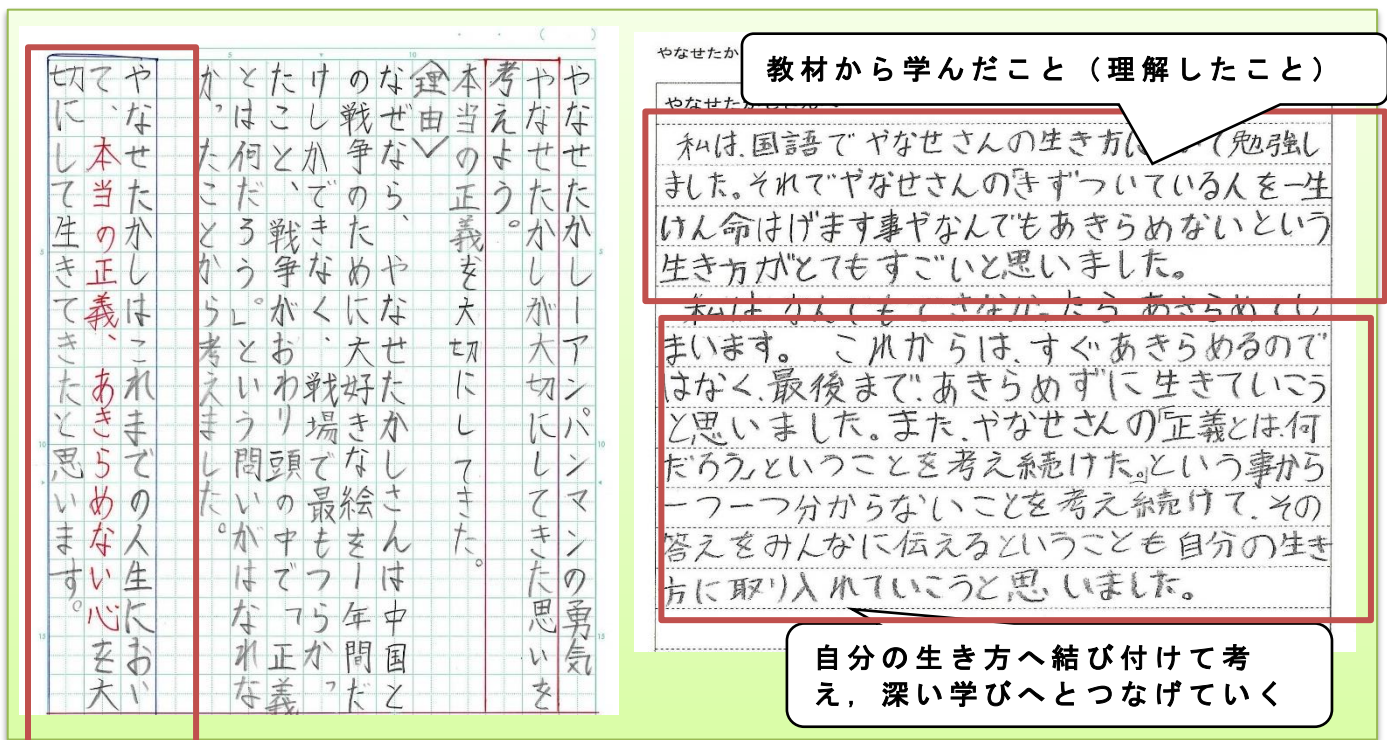


図 17 学び合いから考えを再構築した児童のノートとワークシート

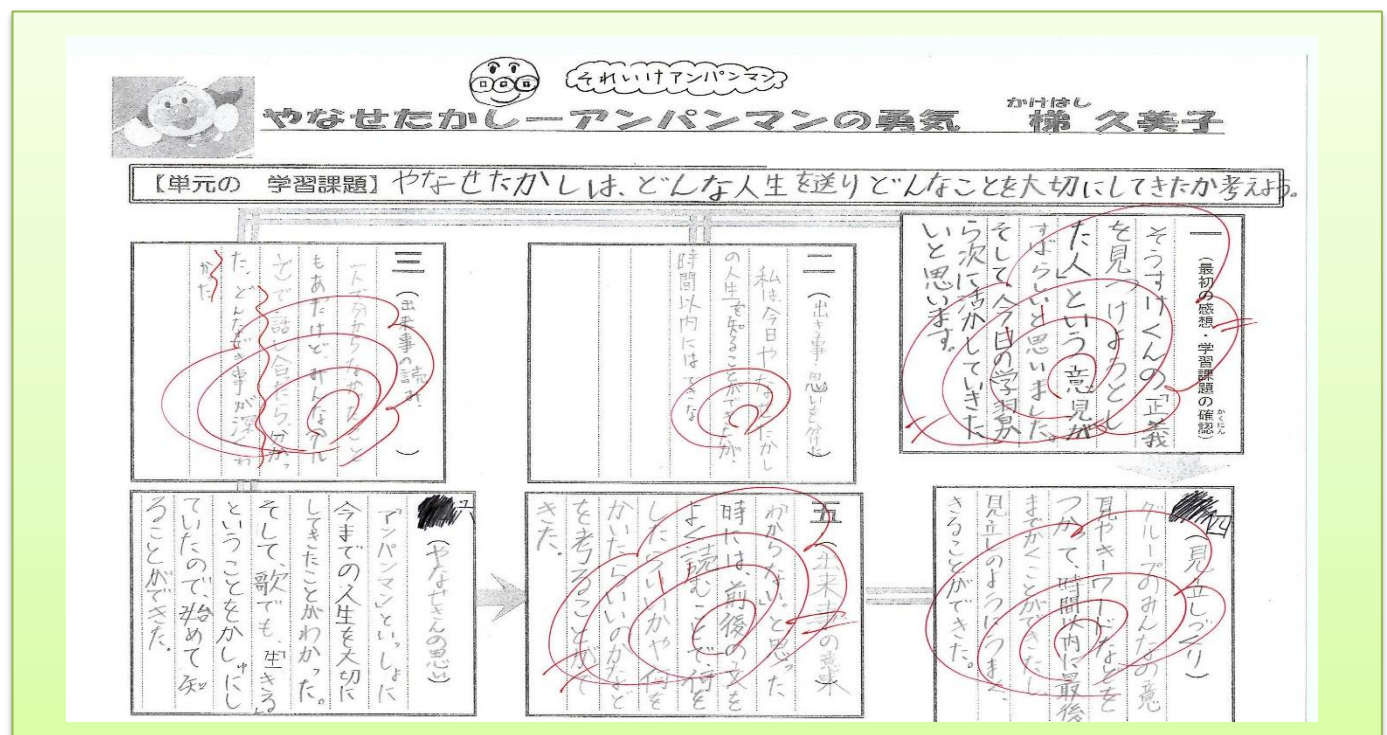


図 18 思考過程がわかる振り返りの工夫「1枚ポートフォリオ」

かけはし 久美子

やなせたかし—アンパンマンの勇氣

【単元の 学習課題】やなせたかしはどんな人生を送りどんなことを木下川に託したのだろう

あまり「出来事」の読み取りがうまくいかないというふりかえり

見出し作りがうまくいかなかったのは、読み取りがうまくいかなかったからという児童のふりかえり

見出し作りがうまくいかなかったので、家庭学習で「出来事」の読み取りのワークシートをもう一度行う。

家庭学習での補充

家庭学習で読み取りを再度行ったので、「行動・思い」の読み取りはまあまあできたというふりかえり

図 19 学びのプロセスをふりかえりによって確認できた児童

あなたが手品師だったらどちらを選ぶ？

A一人の男の子

B大劇場のステージ

授業で提示したプレゼン

図 20 「手品師」の問いの提示と児童のワークシート



図 21 拡散型の問いを設定した道徳の授業の板書

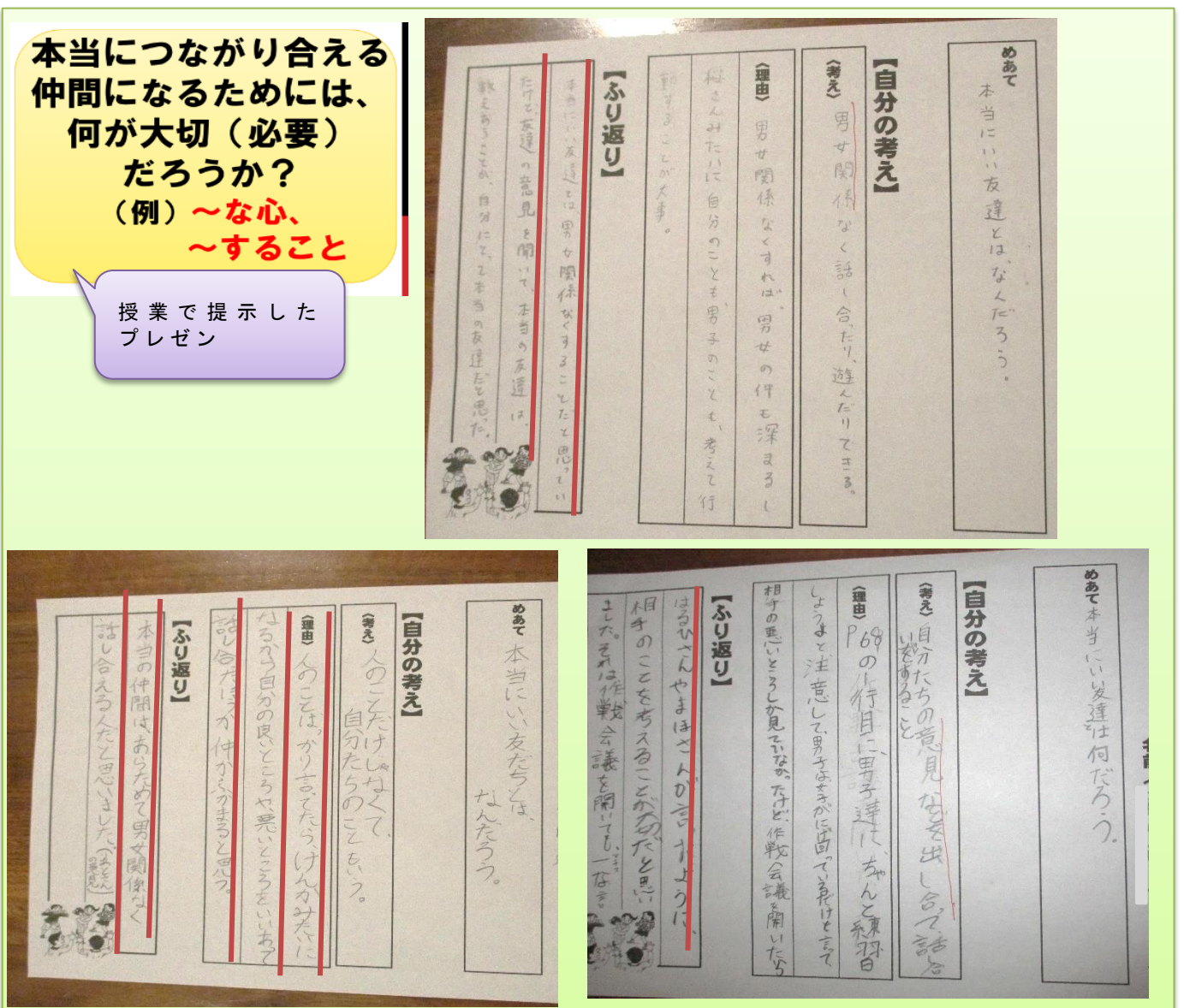


図 22 拡散型の問いを設定した授業の児童のワークシート

第5学年3組 道徳科 学習構想案

日時 令和5年12月20日(水) 第3校時

1 授業の構想

主題名【勝つことよりもすてきなこと】 内容項目【B(10) 友情, 信頼】

(教材名「ドッジボールを百倍楽しくする方法」 出典 小学どうとく ゆたかな心5年(光文書院))

ねらい	よい友達とは、互いを高め合えるような関係であることが 分かり、よりよい友達関係を築いていこうとする態度を育む。
主題について	本主題は、第5学年及び第6学年の内容項目B(10) 友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと」を基にしたものである。 よりよい友達関係を築くには、学習活動や生活の様々な場面を通して、「互いのよさに気づき、認め合う心」をもって過ごすことが大切である。友達の性格や人間性、能力などの優れた部分に目を向け、互いに助言したり助け合ったりすることで男女問わず、よい関係を築くことへとつながっていく。相手に敬意をもって接することでその人のよさを知り、より深い友達関係を築こうとする態度へとつながっていきたい。
ねらいに近づけるための手立て	【自分事として考えるために】 - 導入時に普段の生活の様子やソフトバレーボールの練習風景などの写真を提示し、自分たちと教材にあるクラスとを比べたり重ねたりしながら主題に関わる問題意識をもてるようにする。 - 学級や友達に関するアンケートの結果を示すことで、学級に対する友達の思いを知り、一人一人がよりよい友達関係を築くために何が必要かを考えるきっかけとしたい。 - 考えたことを基に年度当初に話し合って決定した学級目標や学級のルールの見直しへとつなげ、実生活に活かせるようにする。 【多面的・多角的に考えるために】 - 教材の「クラスが変わったきっかけ」を考えさせる場面では、グループで考えを出し合い、整理していくことで、多様な考えに触れ、よい友達とは何かを考えることへとつなげていきたい。 - 中心発問に対しては、考えを自由に交流する場を設定し、自分の考えと友達の考えを比較・再考することができるようにしたい。 【ICTの効果的な活用】 - 自分たちの日常の様子(お互いを認め合っている場面)の動画を終末に流すことで、今まで気づかなかった友達のよさに気付くきっかけとしたい。
児童の実態	【主題に関する意識の状況】 i-check12月5日実施より。 ①今のクラスが好きですか？ 大好き26人(62%) まあまあ16人(38%) あまり0人 好きではない0人。 ②あなたのクラスにはいいところがあると思いますか？ とても35人(83%) いちおう7人(17%) あまり0人 ない0人。 ③クラスの中で誰かが困っているとき、みんなでその人を助けよう、励まそうとする雰囲気がありますか？ とても30人(71%) まあまあ12人(29%) あまり0人 ない0人。 ④クラス全員の一人ひとりのいいところを言葉にしていることができますか？ みんな言える21人(50%) だいたい言える15人(36%) 仲の良い子だけ4人(10%) ほとんど言えない2人(5%) ⑤あなたの気持ちを分かってくれる友達がいますか？ 深く分かってくれる25人(60%) まあまあ14人(33%) 多分いない3人(7%) 一人もいない0人(0%) ⑥クラスの話し合いや友達との間で意見が合わなかったとき、みんなで納得できるように考えて、提案していますか？ いつもしている8人(19%) まあまあ12人(29%) あまり17人(40%) まったく5人(12%) 【考察】 4月から特別活動を中心とした集団づくりに取り組んできた。上の回答から分かるように自分たちの学級のことが好きで、お互いが助け合い、支え合いながら過ごしていこうとする雰囲気はあるものの、友達一人一人のよさについて、あまり答えられない児童が数名いる。また、学級会や普段の学び合いの授業を通して、納得するまで話し合い、合意形成を図ってきたつもりでいたが、意見が合わないときにみんなが納得するよう考えたり提案したりすることができていないと答えた児童が半数以上を占めている。肯定的でない回答をした児童には全体での発表や発言が苦手な児童が多く、授業や日常生活で意思決定する場面において、自分の考えを出せていないことが分かる。 授業を通して、お互いの良さに目を向け、納得できるまで思いを伝え合ったり、話し合ったりできる関係こそいい友達関係だという意識を高めていき、より安心して過ごすことができる学級集団へと育てていきたい。

【B主として人との関わりに関すること（10）友情，信頼】

第1学年及び第2学年	友達と仲よくし，助け合うこと。
第3学年及び第4学年	友達と互いに理解し，信頼し，助け合うこと。
第5学年及び第6学年	友達と互いに信頼し，学び合って友情を深め，異性についても理解しながら，人間関係を築いていくこと。

第4学年（11月） 「十六番目の代表選手」 主題名：心を一つに	→	第5学年（12月） 「ドッジボールを百倍楽しくする方法」 主題名：勝つことよりもすてきなこと	→	第6学年（5月） 「陽子，ドンマイ！」 主題名：信頼し合える友達
---------------------------------------	---	--	---	--

2 展開

過程	時間	学習活動	○主な発問・指示 ・予想される子どもの反応	○教師の支援 ◎評価	備考 ・ICT機器等
導入	5分	1 これまでの自分たちの関係を振り返り，よい友達とは何か出し合う。	・練習中に雰囲気が悪くなったことがあったな。 ・もっとよい関係・クラスにしていきたい。どうしたらよい友達と言えるんだろう。	○ アンケート結果から学級に改善すべき課題があることを知ることで，自分事として考えることができるようにしたい。	写真 アンケート結果
		めあて 本当につながり合う仲間になるためには，何が大切かを考えよう。			
展開	38分	2 教材を通して，よい友達関係を築くために大切なことについて考え，話し合う。 (1) どんな姿があったことでわたしのクラスの雰囲気がよくなったのかを考え，話し合う。 (2) よい友達とはどんな友達なのかを話し合う。	○なぜこのクラスは変わったのだろうか。 (よいと思う姿を出し合う) ・桜さんの言葉かけがあったから。 ・女子と男子がアドバイスを意見や意見を伝え合って練習したことがきっかけ。 ・みんなが駿くんの意見をしっかり聞いたから。 ・最後に駿くんを信頼していたから。 ・お互いのよさを取り入れていったから。	○グループで検討する場面を設定することで発言が苦手な児童も安心して参加し，自分の考えを出せるようにする。	範読（デジタル教科書） ホワイトボード
		中心発問 本当につながり合う仲間になるためには，何が大切（必要）だろうか？			
			(1) 自分の考えをもつ。 (2) 自由に交流し，友達の考えを知る。 (3) 全体で話し合う。 ・お互いのいい部分に目を向けること。 ・お互い自分にないところやちがうところを認め合うこと。 ・お互いの考えを本音で伝え合って受け入れること。 ・同じ目標に向かって男女関係なく頑張れること。	○机間指導で考えを把握するとともに，全員に声掛けを行うことで自信や安心へとつなげたい。 ○学習リーダーを中心に考えの根拠を明らかにして自分の考えを出し，友達の考えを聞くことで自分の考えを広げることへとつなげていきたい。 ◎互いのよいところを認め，相手の考えを取り入れることで，よりよい友達関係が築けるということについて考えをまとめている。	ワークシート
終末	7分	3 視点に沿って学びを振り返る。	・今日の学習を通して考えたことやよい友達とは何か，これからの友達との関係についてなどを考える。	○授業の前と後で自分の考えがどう変化したかを書けるようにする。	動画



図 27 それぞれの良さを生かした多様な表現方法や工夫（ポスターセッション）

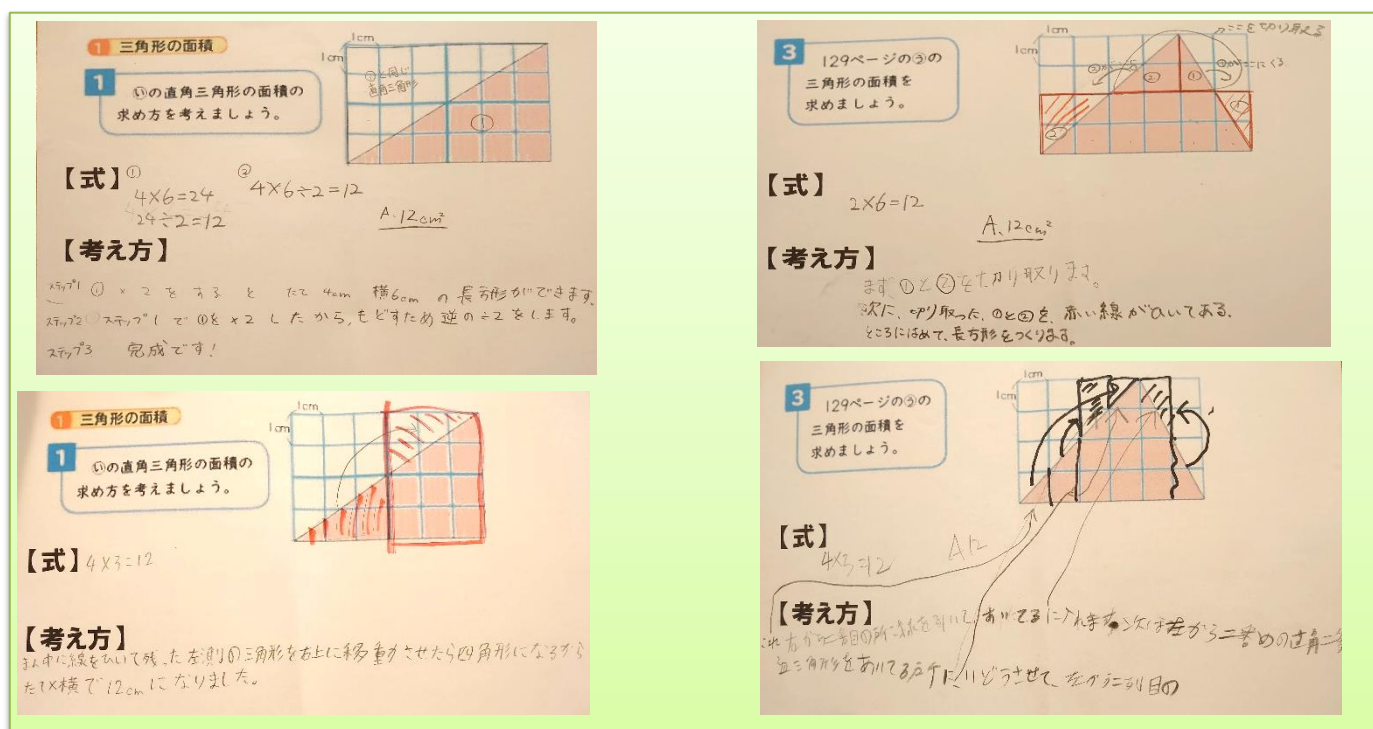


図 28 授業で生まれた多様な考え（ペアのワークシート）



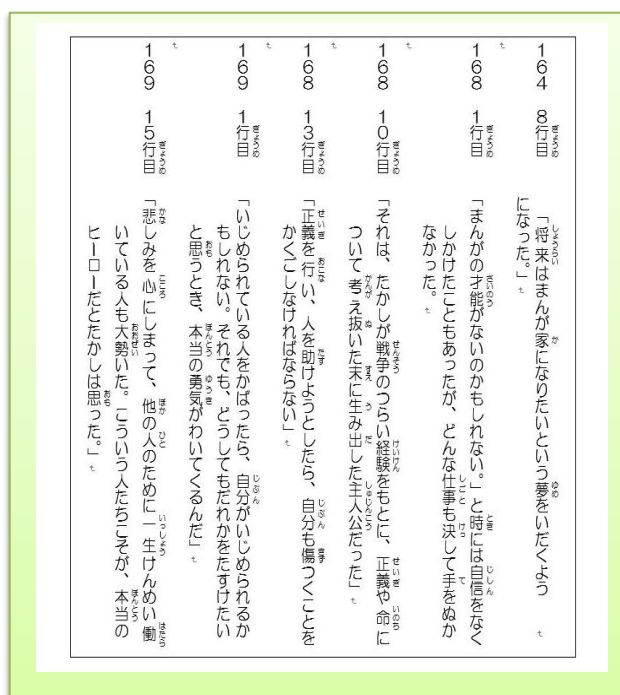


図 30 ルビをつけたヒントカード



図 31 ハンドサインの掲示（児童作成）



図 32 学習リーダーを中心とした児童主体の授業実践



図 33 集団の自治的能力も育む学級会の様子

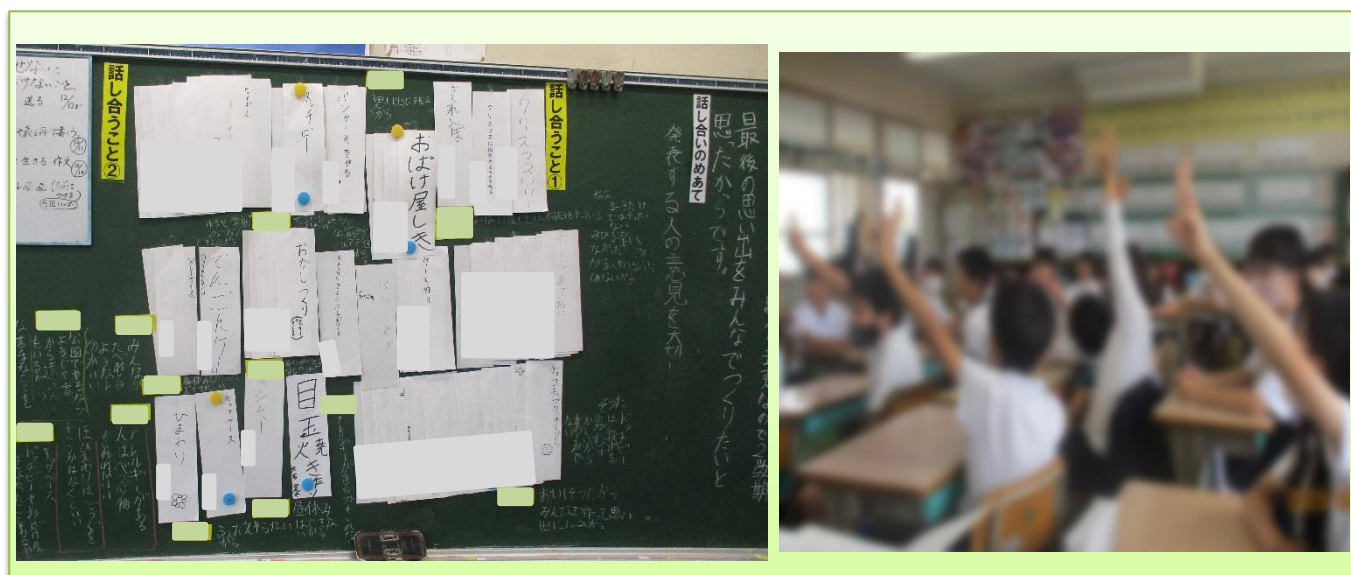


図 34 ブレインストーミングの活用と質問や考えを伝え合う児童の様子

学習構想案 3

第5学年 組 特別活動 学習構想案

期 日 令和5年 7月11日（火）第5校時
場 所
指導者

1 単元構想

単元名	課題「2年生と仲良く楽しくできるイベントを考え、お返しをしよう」。		
内容のまとまりの目標	○ 学級や学校の生活上の諸問題を話し合って解決することや他者と協働して取り組むことの大切さを理解し、合意形成の手順や活動の方法を身に付けるようにする。 ○ 学級や学校の生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図り、協働して実践することができるようにする。 ○ 生活上の諸問題の解決や、協働して実践する活動を通して身に付けたことを生かし、学級や学校における人間関係をよりよく形成し、他者と協働しながら日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	① 学級目標を具現化していくために、議題に対する自分の考えをもち、話し合いの効率的な進め方を理解し、決定したことについてみんなで実践することの意義や方法について理解している。	① 活動計画に基づき、よりよい学級や学校生活づくりに向けて考え、判断し、互いの意見に折り合いをつけながら建設的に話し合っている。	① 2年生に喜んでもらう、関係を築くという責任感をもち、そのための企画について主体的に話し合い、学級目標に向かいながら、思いが反映するような交流会をしようとする態度を育てる。
単元終了時の児童の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）			
自分の役割を考え、学級会の話し合いで決まったことをもとに、みんなで協力し、下級生のためにという思いをもって工夫して活動に取り組むことができる児童。			
単元を通じた課題		本単元で働かせる見方・考え方	
2年生の思いに応え、思い出に残るイベントを開き、今よりもっと仲良くなる。		よりよい学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画し、様々な問題を主体的に解決しようとする。	
指導計画と評価計画（一連の活動と評価）			
日時	形態	学習活動	評価の観点等 ★は記録に残す評価の場面で「具体的評価規準」
7月3日 朝活動	司会グループ	○ アンケートを作成して課題を選定する。（司会グループでアンケートを作成し配付する。）	【態①】〈アンケート・観察〉
7月4日 帰りの会	学級 全員	○ 課題を決定する。	★【態①】〈観察〉 ○ 学級生活をよりよくするために、進んで課題を考えたり、選んだりしようとしている。
7月5日 朝活動	司会グループ	○ 活動計画と学級会シートを作成する。（提案理由、めあて、話し合うこと、決まっていること（条件等）の確認）	★【知②】〈活動計画・観察〉 ○ 計画委員会の役割や、話し合いの進行の仕方等を理解している。
7月7日 朝活動	学級 全員	○ 議題に対する自分の考えをまとめ、意見を出す。	【思①】〈学級会ノート〉
7月10日 朝の時間	司会グループ	○ 全員の考えを読み、意見を整理する。	【知①】〈観察〉
7月11日 5校時 （本時）	学級 全員	○ 提案理由や話し合いのめあてを意識しながら、学級会を行う。【本時】	★【思①】〈観察・学級会ノート〉 ○ 友だちの意見をよく聞き、めあてに沿った意見を出して折り合いをつけて話し合っている。
7月12日 休み時間	掲示係	○ 決まったことを学級活動コーナーに掲示し、係の役割分担をする。	【知①】〈観察〉 【思①】〈観察〉
7月19日 4校時	学級 全員	○ 2年生ときずなを深める会を開催し、終了後には、感想や振り返りを記入する。	★【態①】〈観察・実践シート〉 ○ 「2年生ときずなを深める会」の目的を考え、友達と協力し責任をもって準備したりに参加したりしている。

20

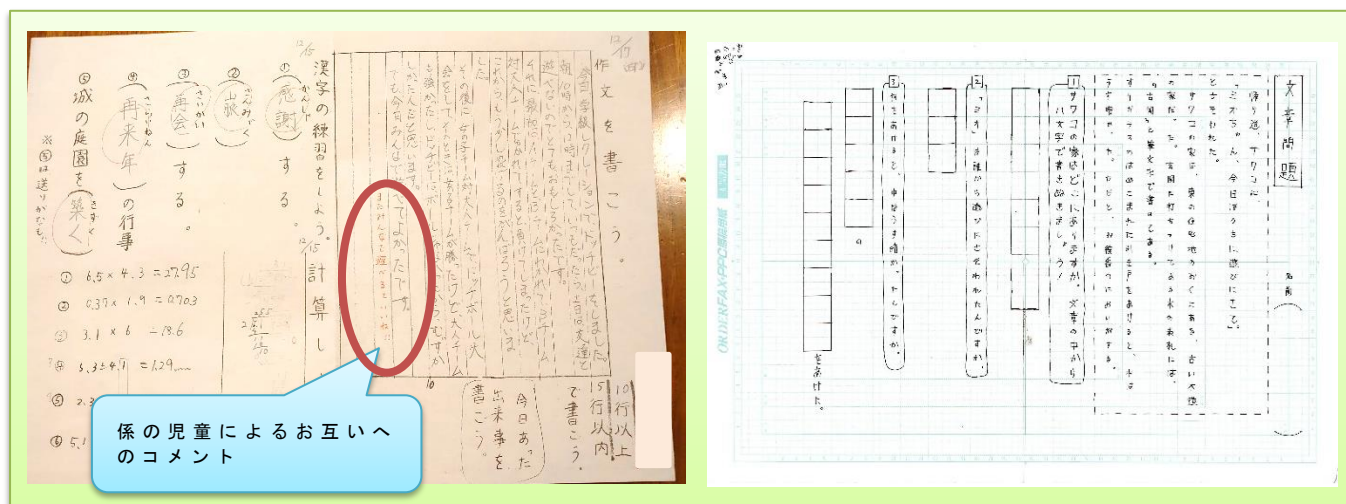


図 36 学習リーダー(係)が作成した宿題

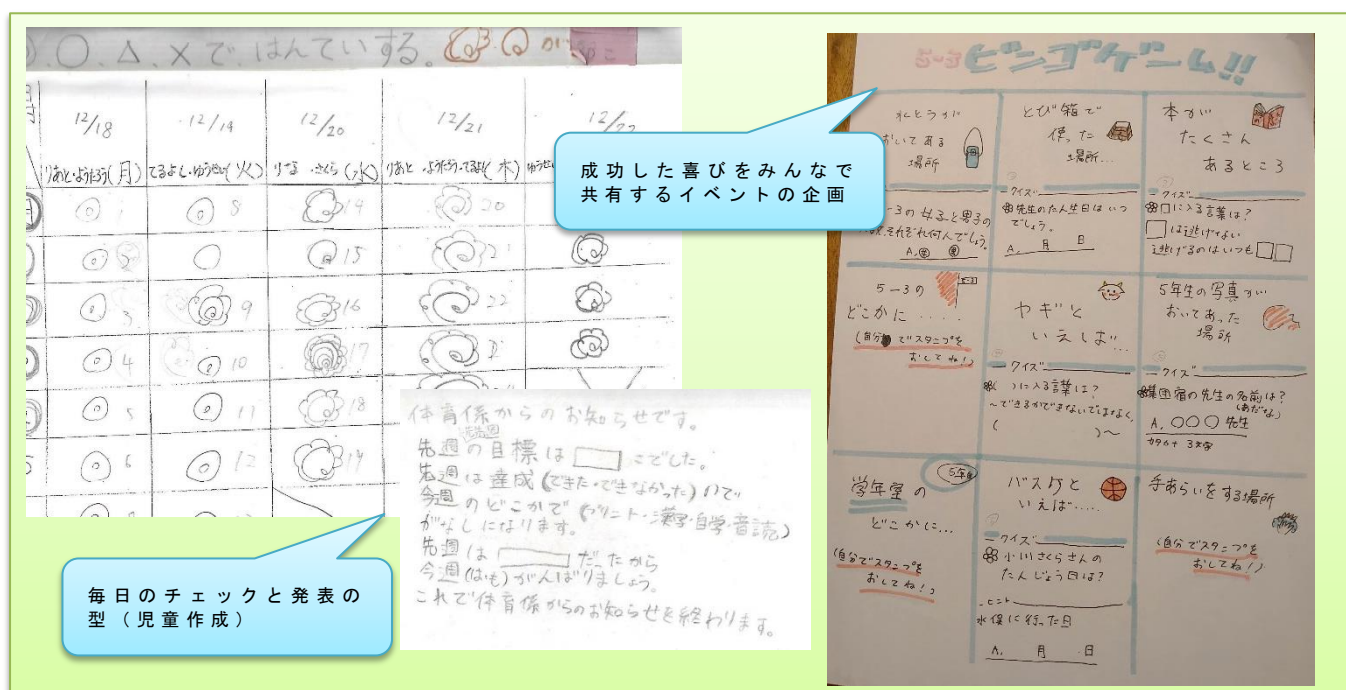


図 37 体育係による授業チェックシート・成功時のイベントの用紙

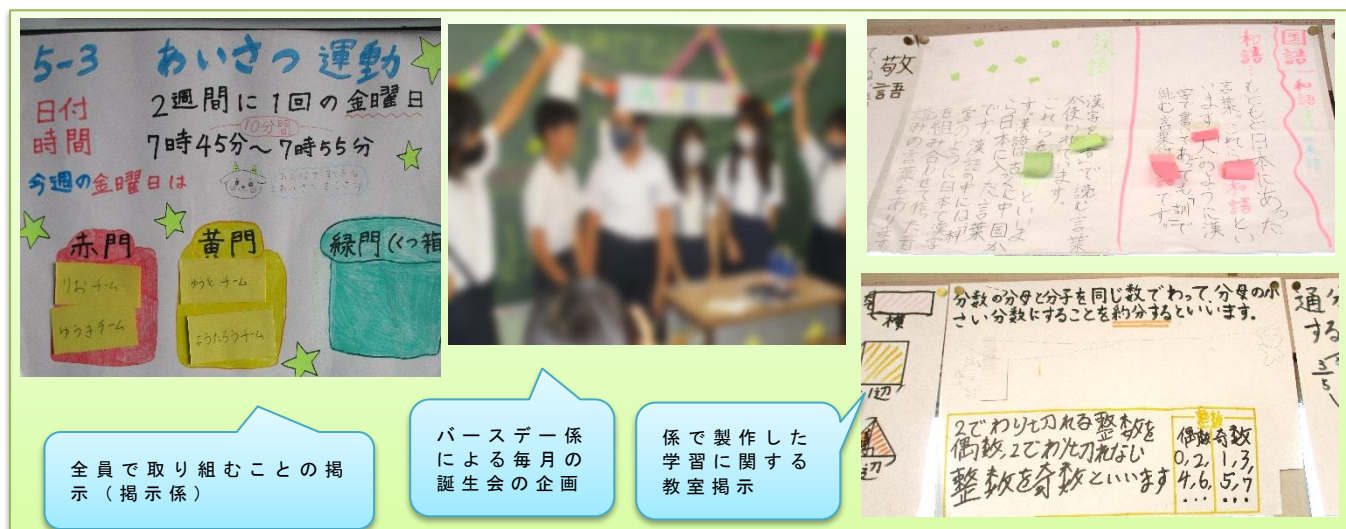


図 38 係活動の充実



図 39 1 分間ステージ（琴の演奏披露）

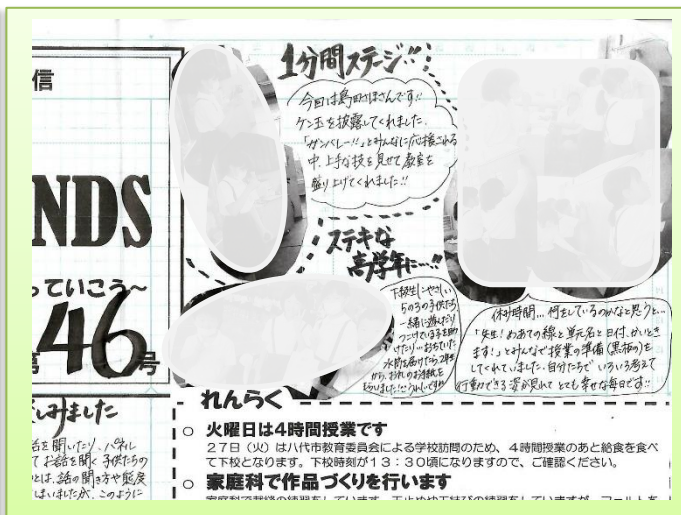


図 40 学級通信による保護者への啓発

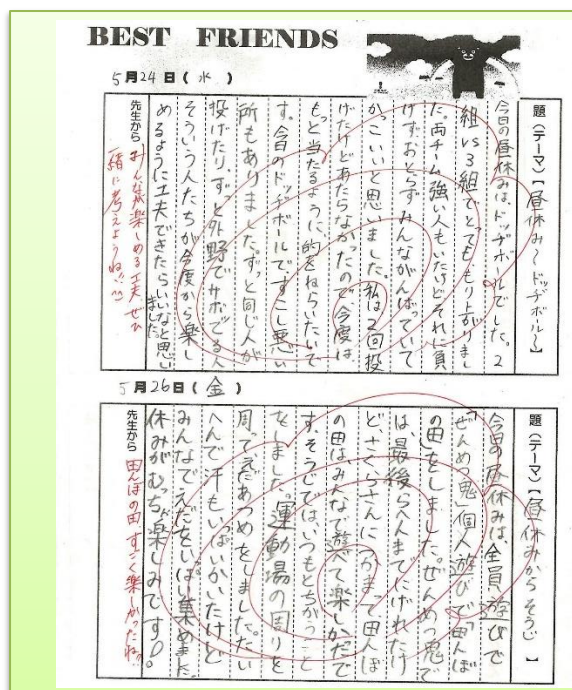


図 41 児童との交換日記

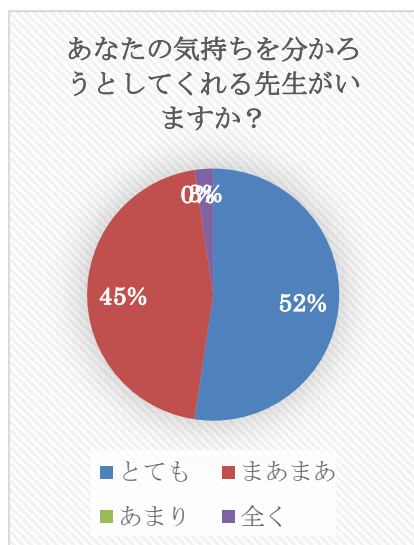
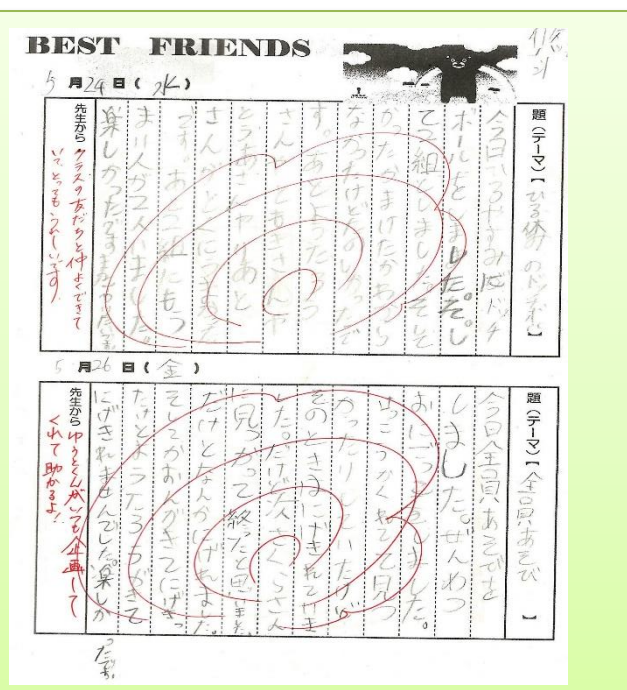


図 42 5 月の意識調査

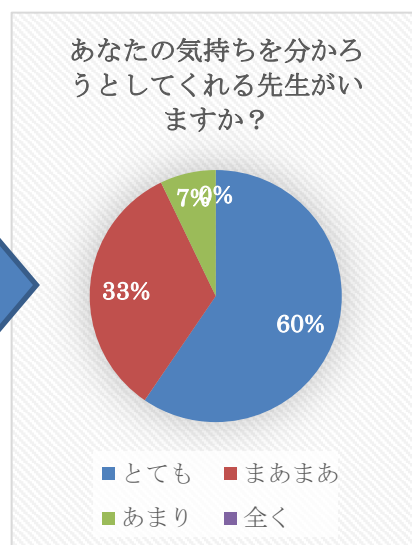


図 43 7 月の意識調査

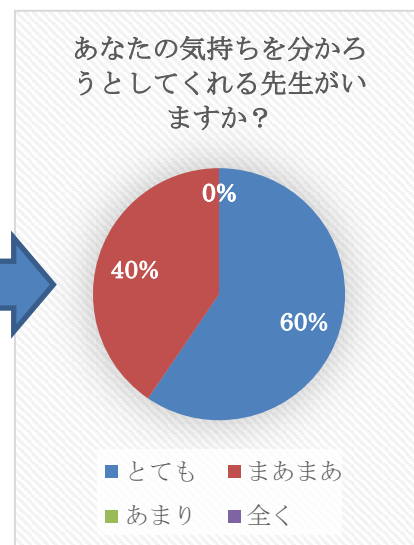


図 44 12 月の意識調査

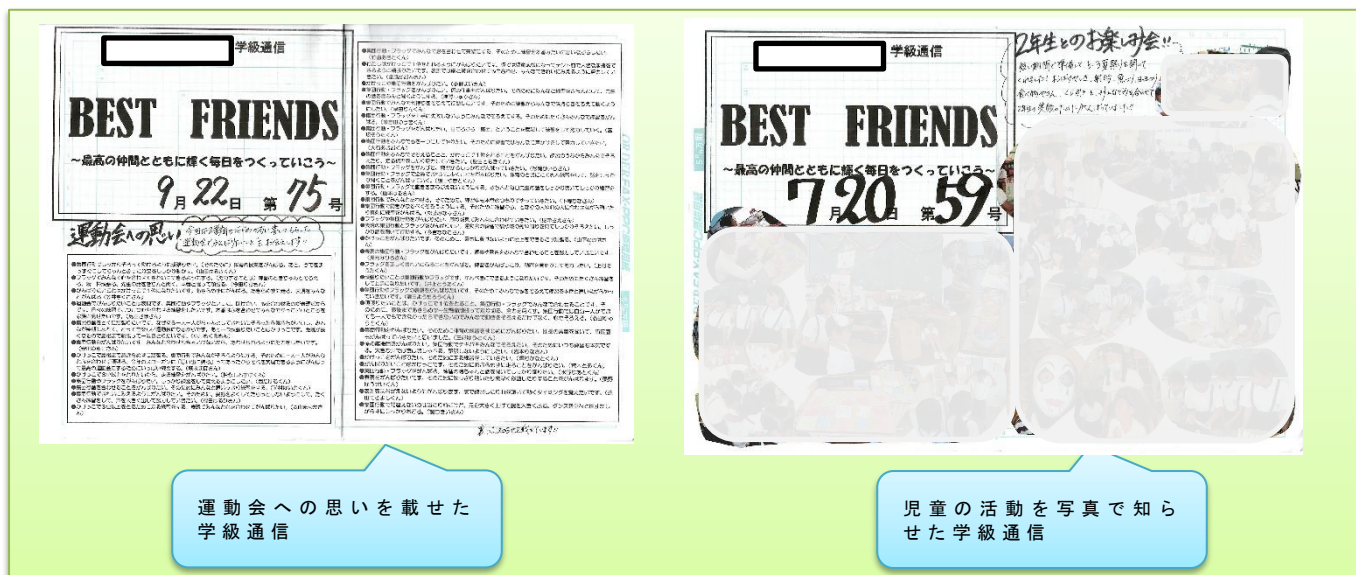


図 45 毎日の学級通信の発行



図 46 一人一人へ思いを返す児童のワークシート

表 5

「授業中自分の考えを発表するとき、考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していますか？」

実施月	1 当てはまる	2 どちらかと言えば 当てはまる	3 どちらかと言えば 当てはまらない	4 当てはまらない	肯定率
5月	16.7%	33.3%	35.7%	14.3%	50.0%
12月	20.9%	46.6%	27.9%	4.6%	67.5%

表 6

「あなたは学校生活の中で他の人が発言したり、発表したりするときに、質問をしていますか？」

実施 月	1 よくしている	2 ときどきしている	3 あまり質問しない	4 質問しない・ 思いつかない	肯定率
5 月	11.9%	21.4%	38.1%	28.6%	33.3%
12 月	9.3%	32.7%	32.5%	25.5%	42.0%

表 7

「自分は先生から期待されている、友達から頼りにされていると感じることがあるか」

実施 月	1 よくある	2 ときどきある	3 あまりない	4 まったくない	肯定率
5 月	16.7%	40.5%	28.6%	14.3%	57.1%
12 月	27.9%	53.1%	19%	0%	81.0%

表 8

「クラスの中で、だれかが困っているとき、その人を助けてあげよう、励ましてあげようとする雰囲気クラスにありますか」

実施 月	1 よくしている	2 ときどきしている	3 あまり質問しない	4 質問しない・ 思いつかない	肯定率
5 月	31.0%	38.1%	19.0%	11.9%	69.0%
12 月	69.8%	30.2%	0%	0%	100.0%

表 9

「クラス全員の一人一人のいいところを言葉にして言うことができますか」

実施 月	1 みんな言える	2 だいたい言える	3 仲のいい子だけ	4 ほとんど言えない	肯定率
5 月	31.0%	38.1%	19.0%	11.9%	69.0%
12 月	50%	35.7%	9.5%	0.4%	85.7%